

左利きの国?!



ねらい

- マイノリティ (少数者) の困難を、個人の問題としてとらえるのではなく、社会の構造としてとらえる。
- 多数派にとっては、あまり意識しないような社会のあり方が、マイノリティの困難につながっていることを知る。
- いまの社会が誰にとって生きやすい／生きにくいのかを考える。
- 社会を変えられるものとしてとらえ、よりよい変化のための主体となることをめざす。

キーワード

社会のなかでの有利／不利
個人モデル／社会モデル

準備物

- 4つのコーナーの答えの紙
- ワークシート1人1枚
- A3白紙 グループに2枚
- 模造紙(1/2サイズ)各グループ1枚
- マーカーセット 各グループ1セット
- 資料1・2 各1人1枚
- セロハンテープ(4つのコーナーの答えを貼るために)

プログラムの流れ

- | | | | | |
|-----|-------------|---------|----------------|-----------------------------|
| 5分 | ① 導入 | | • ねらいとルールの説明など | |
| 20分 | ② ウォーミングアップ | 4つのコーナー | | • 質問に対する自分の考えを動いてあらわす |
| 45分 | ③ 左利きの国?! | | • さまざまな意見に出会う | |
| 20分 | ④ まとめ | 社会を変えよう | | • 少数派であるために不利益をこうむらない社会を考える |

時間	実際の詳細な手順	ポイント
スタート	<h3>1 導入</h3> <p>5分</p> <p> 今日はワークショップ形式で学んでいきます。ワークショップというのは、講師が答えを持っているのではなく、参加者のみなさんがやりとりしながら、考えを深めていく学び方です。</p> <p>人権というと、難しく思われる方も多いかもしれませんが、できるだけ身近なところから考えていきたいと思っています。正解があるわけではありません。みなさんには、ふだんの言葉で、自分の思うことをおしゃべりしていただければと思</p>	<h3>会場の設営</h3> <ul style="list-style-type: none">• いすのみで、ファシリテーターに向かって半円形に並べる。 <p>※P68参照</p>

います。

そのために、3つ、お願いがあります。この場では、「協力・尊重・守秘」をルール(約束)としたいのです。「協力」とは、おたがいに学ぶために協力しましょう、ということ。「尊重」とは、それぞれのあり方や意見・思いを尊重しましょう、ということ。「守秘」とは、ここで出された個人の経験や考えはこの場にとどめる(外に持ち出さない)、ということです。

●「協力・尊重・守秘」と板書する。

今日のテーマは、いわゆる社会での「少数者」(マイノリティと呼ばれることも多いです)にとって、なにが大変なのか、それをを変えるにはどうしたらいいのか、ということを考えていきたいと思います。

5分
経過

2 ウォーミングアップ 4つのコーナー

20分



では、ウォーミングアップをかねて、「4つのコーナー」という活動をやってみましょう。

これからいくつかの質問をします。その質問に対して、「とてもそう思う」「どちらかといえばそう思う」「どちらかといえばそう思わない」「まったくそう思わない」の4つから自分の答えを選び、その紙の貼られている場所へ移動してください。もちろん、正解はありません。みなさんが移動したら、なぜその場所(答え)を選んだのか、少しうかがいたいと思います。

●質問の答えを会場の四隅に貼る。

●質問リスト

- *今日はとても調子がいい
- *価値観が違う人と付き合うのはおもしろい
- *日本の社会は、おおむね暮らしやすい
- *常識やマナーを身につけるのは大事だ
- *コミュニケーションがうまくいかないのは、双方に同じだけの責任がある
- *自分らしさを出すより、まわりに合わせるほうが、世の中ではうまくやっている



では、次の活動にうつりましょう。
グループに分かれて座ってください。

25分
経過

3 左利きの国?!

10分



「100ます計算」ならぬ、「25ます計算」をやってみましょう。
お配りしたワークシートの左利き用をやってみてください。

・ A3程度の紙に大きく「とてもそう思う」「どちらかといえばそう思う」「どちらかといえばそう思わない」「まったくそう思わない」と書くと、見えやすくよい。

・ 時間に応じて、参加者にインタビューをする。答えたくない人に無理強いはいしないこと。

・ 4~5人程度のグループに分け、座ってもらう。
・ 可能なら、「いまの質問の答えがあまり一緒にならなかった人とグループになってください」と声をかける。

・ 参加者には、もちろん、左利きの人もいる。その人には、ふだんよく使われているプリントをやるときとどう違うか、自分の経験を積極的に話してもらうとよい。

●ワークシートを1人1枚配付し、やってみよう。

 やってみていかがでしたか？ いまのは「左利きの国」であたりまえに使われているプリントです。右利きの方、これで計算の力をつけなければならないとしたら、どうでしょうか。

●グループで感想を話し合ってみよう。

15分

 ふだんのわたしたちの社会は「右利きの国」になっています。そのことで左利きの人は、日常的にさまざまな不便・不利益があります。他にどのようなものがあると思いますか？

●A3の紙を配付し、グループで思いついたものを書いてみよう。

 どのくらい出たでしょうか。左利きの不便・不利益についての資料を見てください。思いがけなかったものはあるでしょうか。

●資料1を1人1枚配付し、いくつか読んでみる。

20分

 「100ます計算」は、タテの数字を左右両側に配置することで、左利きの人でもやりやすくすることができます。ほかにも、左利きだからといって不便にならないような工夫がずいぶんみられるようになってきました。しかし、子どもが左利きだと分かった時に、まわりのおとなが右利きに“なおそう”とすることがあります。最近では減ってきたようですが、以前は多くの左利きの子どもが右利きになる練習をさせられてきました。子どもが将来困らないように、というのが理由のようです。

では、先ほど見たような左利きの人への不便・不利益は、こうした個人の（社会にあわせようとする）努力によって解決されるべきことでしょうか？ それとも、まわり（社会）が利き手に関係なく過ごしやすく変わることによって解決すべきでしょうか。「個人の努力」と「社会の変化」、それぞれの「利点」と「限界」を分析してみましょう。

【板書】

	利点	限界
個人の努力		
社会の変化		

●模造紙とマーカー1セットを各グループに配付し、分析表を板書する。前に書いた分析表の枠を模造紙に写してもらおう。各グループで話し合い、表を完成させる。

4 まとめ 社会を変えよう

5分

 今日は、左利きということを切り口に考えましたが、わたしたちの社会にはさまざまな“少数派”がいます。そして、これまでは、少数派の側が(多数派を中心とした)社会のありかたにあわせるよう努力をすることが圧倒的でした。しかし、これからは、社会に人があわせるのではなく、さまざまな人がいることを前提とした社会をつくるのが大切ではないでしょうか。そのためには、多数派の側も巻き込んで変化を起こす必要があります。

そのとき、多数派の中の個人の意識の変化や配慮を求めるのではなく、社会の仕組みを変える、という視点から考えてみましょう。少数派だということで不利益をこうむらないですむような「社会の変化」をうみだすために、どんな制度や仕組み(法律)があったらいいでしょうか? アイデアを出してみてください。

10分

●A3の紙を配付し、グループで書いてもらう。

●出てきたものを全体に発表してもらう。

5分

 制度や仕組みを考える、というのは難しかったかもしれません。が、個人の意識や心がけだけでなく、社会のあり方を問うこと、どうすれば社会が変わるかという視点をもつこと、そして、なによりわたしたちの力で社会をよりよいものに変えられる可能性があるということ、共有できればと思います。

●資料2を1人1枚配付し、紹介する。

• あえて書名に「障害者に迷惑な社会」という言葉を使った人もいる(松兼功著、1994年(平成6年)、晶文社)。

• アイデアなので、荒唐無稽なものでもかまわない。
• 「国会に〈少数者枠〉を義務付ける法律」「少数者向けの商品が一般商品と同額になるための補助金制度」など。

ワークシート

●左利き用

7	3	8	2	9	+
					4
					5
					1
					6
					8

●右利き用

+	3	8	5	9	2
7					
1					
4					
6					
2					

*実際に配付するときは、参加者が書きやすい大きさにするとよい。

資料 1

左利きの人とは…

- 自動販売機は硬貨投入口が右側にある（右手で投入しやすい）。
- 日本の自動改札機は右側に投入口がある。
- エレベーターのボタン、パソコンのテンキーやエンターキー、カメラのシャッターボタンなど、ほとんどのものが右利きを前提にしている。
- 電話機の手話器は左手で持つように配置・配線がなされている。この方が右手でダイヤル、またはプッシュボタンを操作したり、メモを取ったりしやすいから。
- 公衆電話ボックスの折れ戸式の扉は、左手では非常に開けにくい構造になっている（電子レンジやコインロッカーの扉は、左手で開けてから利き手の右手で重いものを出し入れするので、左開きになっている）。
- 缶詰を開けるための缶切りも本来は右手で引く力を利用して開けるが、左手では押し込む操作となり非常に開けにくい。ただし、近年ではプルトップ式が主流になり、困難な場合は減った。
- 文字の留め・跳ねなどは右手で書くことを前提としている。
- はさみのかみ合わせは、右利き用になっており、左手では扱いづらくなっている。ただし、近年では左利き用や両利き用のはさみも販売されている。
- 急須は持ち手の左側に注ぎ口があり、左手では外側に傾けないと注げない（左利き用もある）。
- テストやアンケートなどはたいていが横書きで、問題が左、回答欄が右になっている（右利きの場合問題を見ながら書き込むことができるが、左利きでは問題文が自分の手で隠れてしまうので、いちいち手を浮かせて確認しなければならない）。
- 日本食の食器の並べ方は、はしの握る部分を右向きに置き、左側にご飯茶碗を置くようになっている。
- ボール盤（穴をあけるための工作機械）の卓上のものはドリルを下におろすハンドルが右側に付いており、左手での操作は非常に困難。また、電動丸ノコではモーターの右側に刃があり、右利きが操作する場合は自身の体と刃の間にモーターが位置するが、左利きが操作する場合は刃が体に接近しており、危険性が高い。
- 日本の警察では、警官の装備は拳銃が右、警棒が左の配置になっている。これは、左利きであっても変更が認められない。
- 集団生活において、横に並んで食事をすると左利きと右利きの利き腕がぶつかるといった問題がある。
- 建物設計でも座席間の距離は、右利きの人だけが並んだことを想定している。

個別の不便だけではなく、一般に左利き用の製品は、右利き用に対して生産数の少ないことから高価となるので、経済的負担を強いられる場合がある。さらに、さまざまな不便からくるストレスや、器具の操作ミスによる事故を起こしやすい、などのリスクもある。

左利きの人とは生活の多くの場面で右手を使わざるを得ないので、結果として右手もかなり使えるようになってくることが多い。

「個人モデル」と「社会モデル」

「個人モデル」とは、障害者が困難に直面するのは「その人に障害があるから」であり、克服するのはその人（と家族）の責任だとする考え方である⁽⁶⁾。それに対して「社会モデル」は、「社会こそが『障害（障壁）』をつくっており、それを取り除くのは社会の責務だ」と主張する。人間社会には身体や脳機能に損傷をもつ多様な人々がいるにもかかわらず、社会は少数者の存在やニーズを無視して成立している。学校や職場、街のづくり、慣習や制度、文化、情報など、どれをとっても健常者を基準にしたものであり、そうした社会のあり方こそが障害者に不利を強いている——と考えるのが「社会モデル」である。「障害があるから不便（差別される）」のではなく、「障害とともに生きることを拒否する社会であるから不便」なのだ、と発想の転換を促すのである。

●なぜ社会モデルか

社会モデルは、さほど革新的な概念には見えない。社会に問題があるのは当然であり、今日よく聞かれる「バリアフリー」や「ノーマライゼーション」とどこが違うのか、と思われるかもしれない。だが「バリアフリー」という言葉の汎濫^{はんらん}に比べて、多様な障害者にとって何がどう「バリア（障壁）」なのかに関心が高まっているだろうか。スロープのようなわかりやすいシンボルは別として、多くの障害者にとって切実なバリアは残ったままであるし、その理由も問われてはいない。また「ノーマライゼーション」のかけ声の一方で、なぜアブノーマルな生活を障害者が強いられてきたのかは必ずしも意識されていない。確かに「バリアフリー」や「ノーマライゼーション」は、社会モデルと重なる部分を持つが、そうでない部分もある。これらの概念は、現行社会の構成原理そのものを問うよりは、部分的改良で対処することを可とするものであるし、何より、社会モデルのように社会の全体像を捉えようとするものではないのだ。

社会モデルはものの捉え方を変える。例として「ろう者が講座に出たいが手話通訳がない」という状況を考えよう。「耳が聞こえないから参加できない」と考えるのが個人モデルであり、その場合、手話通訳の用意は「例外的、恩恵的な特別措置」となる。だが社会モデルではそもそも主催者が多様な参加者を想定していないことが問題なのだから、手話通訳は「本来、用意すべきこと」であり、ろう者が主催者にそれを求めるのは当然の権利だ。主張しづらいのが現実だが、「たった一人のために予算を使えない」といった多数派の論理に抵抗し、権利を求める根拠となるのが社会モデルなのである。

●社会モデルは別名「人権モデル」

社会モデルは「人権モデル」と言いかえられるほど、人権と親和性が高い概念である⁽⁷⁾。当事者運動の過程で血肉化された社会モデルの考え方は、個々の障害者が直面する問題を、徹底して社会の文脈で捉える思想であり、運動における武器でもあった。駅の改良にせよ、教育や就労をめぐる闘いにせよ、個人の努力や周囲の支援に頼るのではなく、社会の側の責

任として解決すべきだと運動は主張してきたし、その認識を社会一般に広めようともしてきた。「社会モデル」という言葉を使わなくとも、日本で行われてきた障害当事者運動は社会モデルの視点を含んできた。障害者問題を人権の視点から捉えるならば、社会モデルは不可欠の視点なのである。

- (6) 個人モデルは別名「医学モデル」といい、治療やリハビリによる身体機能向上を問題解決の柱と考え、障害者は何をにおいてもそれに専念すべきとされる。他方、社会モデルは医療を相対化し、治療も訓練も本人の選択だと考える。
- (7) 1993年に国連総会で採択された「障害者の機会均等に関する基準規則」では既に社会モデルが採用されており、「障害者権利条約」制定に向けた動きのなかでは、社会モデルを「人権モデル」と呼ぶ提案が行われている。「障害者差別禁止法制定」作業チーム編『当事者がつくる障害者差別禁止法—保護から権利へ』現代書館、2002年。

出典：「障害者問題を扱う人権啓発」再考—「個人-社会モデル」「障害者役割」を手がかりとして—
(松波めぐみ、『部落解放研究』151号2003年(平成15年)より抜粋)
発行：(社) 部落解放・人権研究所